The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	TA (Teaching Assistant) の声　サイバーメディアフォーラム no.3
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2002, 3, p. 46-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73112
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

TA(Teaching Assistant)の声

CALL システムを利用して思うこと

奥田 晃子（大学院基礎工学研究科 システム人間系 D2）

技術の発達というものはめまぐるしいもので、私が大学入学時に英語の授業ではじめて使用し、そのハイテクさ（？）に感動したLL機材のシステムというのはすでに古いものとなり、現在ではコンピュータによる語学教育プログラムが進行しつつある。今回TAとしてそのシステムを垣間見て感じたことについて、つたない文ではあるが述べてみたいと思う。

「コンピュータによる語学教育プログラム」という言葉を聞いて、正直最初は良い印象を受けず、「語学学習でさえ他人と交わることなくできるようになる時代なのか。」という（若干悲観的でさえある）思いさえ持った。というのも、学習形態が「教員対学生・学生同士」から「個々の学生対コンピュータ」になるというイメージがあったからである。従って残念ながら、実際に授業が始まるまで「コンピュータによる語学教育プログラム」の意義が全く理解できなかった。

実際に授業が始まって、英語の授業では語学学習ソフトであるNetAcademyを用いた学習を行った。NetAcademyは要するに「TOEIC試験対策ソフト」であるが、個々の学生のレベル差が大きいTOEICなどの資格試験対策にコンピュータを用いた学習を取り入れるのは確かに有効であると思われる。学生がそれぞれ自分のレベルにあわせて学習を行うことができるからである。また、視覚・聴覚の両方を刺激する学習はコンピュータを用いた学習の利点の一つであると思われる。

しかし、コンピュータを用いたこの学習がどのくらい知識として定着するかということに関しては多少の疑問がある。少し話は違うが、以前研究室で「インターネット語彙チェックテスト」なるものが流行したことがある。コンピュータの画面を見ながら質問文と一致する単語を選んでいくものである。やっていくとどんどんレベルがあがっていくので皆は面白がってやっていたのだが、横で見ていてどうにも知識として定着しているようには見えなかった。どちらかというと、簡単にマウスをクリックするだけでなされてしまう学習はゲーム感覚である。ちなみにこの「インターネット語彙チェックテスト」なるものは1ヶ月もたたぬうちに廃れてしまった。

また、ドイツ語の授業では主にインターネットを用いた学習を行った。インターネット上で個々の学生が単語を見つけたり、情報を得たりし、その情報を掲示板で共有するという方法は、コンピュータを用いた学習でないとできないことであると思われる。インターネットを用いることにより、テキストなどにはでてこない現在の言い回しなど「生」の語学を知ることができるので、学生の語学に対する興味を広げることができる。また、語学学習において「異文化の理解」というのは必要不可欠であると思うのだが、インターネットを用いることにより、普段あまり接することのない「異文化」に関する情報が簡単に手に入るということは、大変魅力的なことであると思われる。

よく言われることであるが、日本人は語学の「読む・書く」能力は高いが、「聞く・話す」能力は高くない。英語圏でない外国でも、多くの大学卒の人は英語を話すことができる。世界的に外国語（特に英語）の必要性が増大している中で、大学では外国語の授業時間数が減少しているのが現状である。そのような状況下で、今後このCALLシステムがどのように定着し、どのような成果をあげていくのかは、非常に興味深いものであると思われる。

しかし何であっても同じであると思うが、要はその便利な道具をどのように人間が使いこなすかが一番の問題であり、今後授業をプロデュースする教員の技量がこのCALLシステムを生かしも殺しもするのではないかな、というのが一番正直な感想であったり・・・。

「教える」と「学ぶ」の両方の視点から

白木 千津子（大学院基礎工学研究科 システム人間系専攻 M2）

CALL の授業のティーチングアシスタント(TA)をしたきっかけは、英語やパソコンが得意だからではなく、むしろ年々ますます低下していく自分の英語力を少しでも高めるためでした。しかも基礎工学部所属といえあまりパソコンに詳しくなかったので、パソコンを使った授業の TA が勤まるのか内心びくびくしていました。実際は確かに操作に慣れるまでは大変でしたが、慣れれば簡単便利で、後は英語を楽しく学びながら TA をすることができました。私は TA という教える仕事のお手伝いをしながら英語を学んでいたので、「教える」と「学ぶ」の両方の立場から CALL の授業を経験できたと思います。

CALL システムといっても、私も大学 2 年生の時に、共通教育の英作文の授業でコンピュータを利用したことがあったので、最初はあまり新鮮さを感じませんでした。しかし、ネットアカデミーやロボワードなどの教材の質が向上したり、インターネットを使いこなして英語を学習できる学生が増えたりした事は、大変うらやましいなと思いました。

リーディングとリスニングを勉強するのに必要なことは全て入っており、スピードリーディングや全訳、TOEIC の対策までできるネットアカデミー。しかも学内ならいつでもどこでも勉強でき、学習履歴も残す事が出来ます。分からない単語があっても、その単語にマウスのカーソルを持ってくるだけで、意味や例文を示してくれるロボワード。辞書なんて重いものを持ち運んで学校に通う必要はもうありません。もしロボワードで調べても分からない英単語があっても、その場ですぐにインターネットの検索ページなどで調べることもできます。それ以外にもインターネットは海外のニュースやホームページを見たりエッセイが読めたりと英語の宝庫です。

リアルタイムで、リアルタイムの英語が勉強できるような環境に、時間をかけて辞書を一生懸命ひきながら一文ずつ訳していた昔の英語の勉強もここまで様変わりしたのかと、ただただ驚くばかりでした。手間が省ける上、自分のペースや学力に合わせて英語を勉強できるのです。これから英語を学ぶ人達はなんて恵まれており、私もあと数年若ければよかったのに、、、と思いました（十分若いつもりですが）。

しかし、そんな CALL の授業にも落とし穴があって、それは下手するとパソコンの画面が教師になってしまうことです。授業中、生徒は黙々とネットアカデミーに熱中し、嬉しい反面、私も先生も時々自分の存在価値がなくなってしまったような寂しい気分に陥りました。

当たり前の事ですが、CALL の授業で使える英語の教材は、英語を学習する手段の一つであって、教える側が必要な時に必要なものだけ選ばなければいけません。なぜなら、なんでもかんでもやろうとすれば、本当に大切な情報は伝わりにくくなるし、分からない事があったとき、パソコンの中の教材から答えを探すよりも先生や友達に聞く方がずっと早くて分かりやすいからです。

また、パソコンを導入する事で、大人数でそれぞれ自分にあった授業を行えますが、欲をいうとそれでも小人数の授業の方が良いと思います。私は 2 クラス TA を担当したのですが、人数が多い授業と、少ない授業では、少ない授業の方がみんなの意見も活発で、教える方もひとりひとりの生徒に目が届きやすいと思いました。おそらくあまり人数が多いと誰かがゲームをしたり、授業に関係のないインターネットのページを見たりしていても気付きにくいと思います（教え慣れている人なら人数が多くても気付くのでしょうが）。

今の CALL のような授業は、私が小学生か中学生の時にハイテク化された未来の学校の典型例に挙げられていたようなものだと思います。しかし、いくら時代が変わっても、人が「学ぶ」、「教える」といった行為の本質は変わらないような気がします。ちなみに私は家庭教師のアルバイトで、生徒に辞書を使って一文ずつ和訳させるといった古臭い授業を相変わらず続けています。こういった勉強の仕方も身につけていなければ、CALL のような授業も十分に活用できないと思うからです。CALL システムは授業の補助として適切に使うことで、英語の学習効果は今まで以上に上がると思います。